

2016年7月4日

札幌チャレラジオ通信 第26回

飯村：三角山放送局をお聴きの皆さんこんにちは。札幌チャレラジオ通信です。私はパーソナリティーのNPO法人札幌チャレンジの飯村です。よろしくお願いします。

札幌チャレラジオ通信は自立を目指す障害のある人がITで、マザル、ハタラク、拓き合う社会を作りたいとの思いで活動をしているNPO法人札幌チャレンジが毎週月曜日のこの時間に札幌チャレンジの活動内容をお伝えする番組です。2016年1年間放送します。今日はですね、講習グループの私飯村と、それからですね、もう一人の老人、事務局長の岡野がお送りいたします。岡野さんよろしくお願いします。

岡野：はい、よろしくお願いします。

飯村：7月になりました。なかなかね、夏になりそうなやはり寒いようなはっきりしない天気が続いていますけれども岡野さん調子いかがですか。なにかこないだちょっとね。

岡野：年ですね。

飯村：ですね。

岡野：多少ちょっと疲労がたまっちゃって。

飯村：そういうことですね。私も特に異常はないのですが、過労、高齢化はね、止まりません。それではですね、今日のゲストはですね、つい昨日と今日調子を悪くしたばかりの方においでいただいております。札幌チャレンジのボランティアとしていろいろところで活躍いただいて協力していただいております、阿部幸太郎さんです。阿部さんこんにちは、よろしくお願いします。

阿部：こんにちは、阿部幸太郎です。よろしくお願いします。

飯村・岡野：よろしくお願いします。

飯村：まず阿部さんにはですね、いろいろところでお手伝いいただいて、ちょっとねいなくなっている時に声をかけてね。

阿部：そうですね。

飯村：途中でね、ちょっといなくなったことがありましてね、そのことも後でお伺いしますが、札幌チャレンジとの関わりですね、きっかけこれはなんでしたっけ。

阿部：私が活動を参加させていただききっかけになったのは広報札幌のなかに札幌市の障害者の方向けのパソコンボランティアの募集の広告がありまして、それを見て応募したのがきっかけでした。

飯村：それを見てですね、最近ね、札幌チャレンジに関わるきっかけとしてですね、札幌

チャレンジドが札幌市のパソコンボランティア、その講習をやっているものですからね、そのきっかけになるのが非常に多いのですけどね。それからそれをやっているのが札幌チャレンジドということを知っていただいてそれからね、札幌チャレンジドの方に来ていただいてっというふうに覚えているのだけれども。

阿部：そうですね、入り口がパソコンボランティアで、そこから活動を広げさせていただいたという格好でした。

飯村：それ以前にあれですか、チャレンジド、いわゆる障害のある方とのなにがしかの関わりというのは。

阿部：はい、私札幌出身なのですけれども、大学を卒業してからしばらく小樽市におりました。就職したての頃よくお世話になっていた方が脳梗塞で体が不自由になってしまったりということがあって、その方のパソコン操作であったりあるいは日常のいろいろなお手伝いを結構長くさせていただいてたっというのがきっかけで障害者の方にもっとお手伝いできることがないかなあって考えるようにすを広げていただけましたね。

飯村：その時にパソコンといわゆる障害のある方とというお付き合いがあったということですか。

阿部：そうですね。その方を入りにいろいろ教えていただいて今に繋がっている感じです。

飯村：それで実際に札幌チャレンジドとですね、講習の方をお手伝いいただいて、どんな感じでした。

阿部：そうですね、実際に障害のある方といっても、本当に持っているものですか、できることっていうのが多様ですので、その方が今どういった状況かっていうのをきちんと自分が把握することと、それからその方がパソコンを通して自分の生活に何を実現させていただきたいのかっていうところをしっかりと理解することが、通常パソコンをいろいろな方に教えること以上にすごい大切だなって感じております。

飯村：はい、そういう場所っていうのはね、そんなに多くはないと思うのですけどね。なにがしか単に学ぶというよりも皆と一緒にやっとなにか面白いかなっていうね、そういう雰囲気がいつも出せればいいと思っているのですけれども。

阿部：そうですね。

飯村：そういう感じはどうでした。

阿部：すごく札幌チャレンジドの講習っていうのは、やはり思ったのは参加される方と講師の方の距離間がすごく近くて、パソコンの講習を軸に自分の困ってることとか、あるいは近況とかをすごくざっくばらんに話しながら楽しくやれていて、その上でパソコンを勉強していこうというところはすごくいいなあとって雰囲気を感じています。

飯村：ありがとうございます。その線でずっとやってきてますので、まずはね、ちょっと楽しんでいただこうということをね、思ってるわけなのですよね。

阿部：はい。

飯村：まずやはり楽しんでみることです。思いますよ。

阿部：本当にそうですよね。

飯村：それからですね、そもそもがね札幌市の登録ボランティアとして講師養成講座を受講していただいて登録してというふうになって。それで札幌市のボランティアの方は最初の年はどうでしたっけ。

阿部：最初の年はお一方受け持ちをさせていただきまして。聴覚の障害をお持ちということだったのですけれども、パソコンの経験は結構ありまして、主にお孫さんとメールをしたりですとか word を使って自分の人生の記録を残したいとかってというのがご希望があったので、そこに向けて4、5回訪問して、パソコン環境を整えたりですとか実際の操作のお手伝いなんかをさせていただきました。

飯村：教室の中でね、複数の人たちを相手に楽しく、お宅に赴いてですね、その方の中で、お家の中で教えるというのはちょっと違ったものがあるでしょうね。

阿部：やはりそうですね。ご自宅に訪問して僕ボランティアとしてやらせていただく方が、その方のご要望とかにきめ細かく添ってできますし、教室とはまた違った良さっていうものがあるのかなあと思いました。

飯村：ということでですね、まず札幌チャレンジドの講習を手伝っていただいて、そして本来のパソコンボランティアですね、訪問ボランティア、これをやっていただいて、それからまたね、さらに逸脱してもう一つやってらっしゃるわけだよね。

阿部：そうです、札幌チャレンジドの活動以外に i C a r e ほっかいどうという団体で私活動させていただいております、ALSですとか、脳性麻痺とか、かなり程度でいうと重い障害をお持ちの方のコミュニケーションの支援をお手伝いさせております。

飯村：はい、i C a r e ほっかいどうについてはね、岡野さんね、前の事務局長の。

岡野：佐藤美由紀さんの方だね。

飯村：出ていただいて。その時にはね、多少お話をお伺いしたのですけれども、どんなようなサポートを実際にやっていらっしゃるのかしらね。それと使う機器ね、これについてもちょっと教えていただけるかしら。

阿部：一番よくご相談があるのがALS筋萎縮性側索硬化症という病気をお持ちの方の相談が多くてですね、病気と診断されてこれから進行していくっていう段階でこれから体が動かなくなる声が出なくなるっていう時に備えて、どのように自分のコミュニケーション

手段を残していったらいいのだろうってところの入口の相談が多いかなあと感じております。

飯村：実際にその手段としてね用いる機器があります。機器がありますよね。

阿部：はい、よく皆さんイメージされるものであれば透明なプラスチック盤に50音の文字を書いた透明な文字盤、あれを読み取るっていう方法もありますし、もうちょっと機械といたしましては、たとえばレッツ・チャットですとか、伝の心と呼ばれるような機械がありまして、それぞれ電池とかパソコンのように動くものでして、文字のところは光がぴかっと光ってそれを読み取って押すことで、自分の文字を液晶に表示したりして言葉を作ったりできるっていうような機械があったりします。あと最近でしたらiPadですとかタブレット、そういった物をできるだけ自分の体の動くところでどう使っていこうかっていったようなご相談も増えてきてるかなあとと思います。

飯村：それこそですね、意思伝達装置のサポートということで解釈していただいているわけですが、それ以前にね、意志表示ができないわけです。意思表示っていうかね、普通の意味での言語のコミュニケーションできないのですよね。そうすると安部さんご自身と相手の方とのね意志のやり取りっていうことに対してはどうですか？不安とか戸惑いとかあるいは困難さとかその辺はいかがでした。

阿部：そうですね、患者さんそれぞれの私の環境は違うのですけれども。

飯村：はい。

阿部：周りにご家族であったりよく入ってらっしゃるヘルパーさん等がいらっしゃるばあいは、それまでの敬意を確り聞くということをやっておりますし。

飯村：はい。

阿部：あとその患者さんがそれまでどのような人生を送られてきたかとか、どんな方なのかっていうことを深くお話を聞くことで

飯村：うん。

阿部：自分のなかでもすこしイメージを作ったりして行ってということで。

飯村：うん。

阿部：今お話してるように。

飯村：はい。

阿部：言葉でのコミュニケーションが難しい部分とか。

飯村：はい。

阿部：自分のなかでフォローしていければなあと考えていまも続けています。

飯村：はい。やはりまずね、お互いの信頼関係っていうのを気付かなくちゃいけないですよ

ね。

阿部：はい。そのとおりです。

飯村：患者さんとその信頼関係に基づいたやりとりがあつていうのはすごくやり気になるところなんじゃない。

阿部：そうですね。やはり普段お話をさせていただくなかで自分が 1 方通行で進んでいかつていうところそれはすごく気にしているところですので多少でも首が動くですとかあるいは瞬きで yes no のコミュニケーションが取れるっていったばあいは極力そういった自分が 1 方通行になっていないかというところを気を配って常に気を付けていかなければなあと思っています。

飯村：そういう経験つていうのはねいろいろな方をサポートしても ALS の方だけじゃなくてね、いろいろなところで逆に自分の力になりますよね。

阿部：まさにその通りだと思います。

飯村：はい、それではですねリクエスト曲をいただくのですけれどもまずちょっと阿部さんの今日のリクエスト曲紹介いただけますでしょうか。

阿部：はい。今日私がリクエストさせていただくのは、カズンの wave という曲です。

飯村：はい。それではですね、阿部さんのリクエスト曲、カズンではお聴きください。

飯村：はい。それではですね、後半に参りましょう。

全般はですね、この活動のきっかけとですね現在のご様子をお伺いしましたけれどもおりおりお手伝いいただいた阿部さんは急に行方をくらました時期がありましたね。

阿部：そうです。日本からいなくなったような。

飯村：ちょっとねそのわけを聞かせていただきましょうか。なにやってたの。

阿部：青年海外協力隊というのを皆さんご存知でしょうかね。

飯村：はい。

阿部：ボランティア活動をしてることなのですけれども。それに応募して合格させていただいて、東ティモールという国に行って高校の教員としてパソコンを教えていました。

飯村：東ティモールね。ご存知。

岡野：生江は聞いたことありますけど。

飯村：名前はね。

岡野：大体どの辺の場所なのかなあ。

阿部：イメージとしては大体オーストラリアをイメージしていただいて、オーストラリアの本当に北西のちょっと北側にある本当に小さな島国なのですけれども、面積でいうと東ティモールというのが大体岩手県と同じくらいの面積しかなくて 120 万人位の人口の国なの

ですよ。

飯村：それで東ティモールっていうのは国ですよ。

阿部：そうです。

飯村：うん。

阿部：東ティモールというのが 2020 年に独立をした 21 世紀で最初の独立国と言われてるのですけれども、500 年位と言われてそこからまだまだ国作りの最中でその国作りの支援でその一部のチャンスとしていただいたっていうことだったのですね。

飯村：そこでどんなことをやってらしたのですか。

阿部：はい。私は現地の教会が運営する高校で実際に IT の教員として Microsoft の word とか excel そういったものの実習を現地のパソコン、IT を担当する先生と一緒に教えていました。

飯村：何人くらいを相手に大体どのようなことをどんな手順で何か結構大変そうな気がするのだけでも。

阿部：そうですね、現地の私の行った学校は 1 クラス大体 40 人から多いところで 55 人くらいの生徒がいます。

飯村：いるねえ。

岡野：55 人、すごいですね。

阿部：これでもまだ少ない方なのですから。

岡野：あ、そうなんだ。

阿部：日本でいうところの大体一つの駒 1 時間が 45 分から 50 分くらいなのですから。

飯村：うん。

阿部：IT の科目は 2 駒続きになっておりました。

飯村：はい。

阿部：大体 90 分くらいの授業を 1 年間 word をやってそれから excel をやってっていう感じで現地の先生と一緒に教えておりました。

飯村：うん。

阿部：使ってるパソコンはほとんどが Windows の xp で私が赴任していたのが 2014 年から 2015 年まで昨年までいたのですけれども、日本では Windows7 とか Windows8 が使われてるっていうところだったので、やはり正規品ですとか新しいしっかりしたパソコンっていうものがないのでいろいろな国からお古のパソコンが送られてきてそれを順繰り順繰り使ってるっていうような状況で直志直志使ってるっていう状況でした。

飯村：そもそも東ティモールの IT 事情というかネットであるとかですねパソコンの普及率であるとかその辺はどうなのですか。

阿部：パソコンに関してはパソコン以外にもタブレットですとかあといろいろなものが出てきてますので。そういった IT 関連の機器っていうふうにすると半数からサンブンノ 2 ぐらいの人たちは持っているのかなっていう感じがしまして。

飯村：いいことですね。

阿部：携帯電話に関してはいわゆる日本でガラケーと呼ばれているような 3g タイプの携帯っていうのは人口でいうと多分 9 割以上の人々が持ってるんじゃないでしょうかね。

飯村：うん。

阿部：遅いながらもインターネットもいちおう繋がってはいますので、そういった携帯電話インターネットパソコンに触れるっていう機会はかなりイメージとして増えてきているのかなあと思います。

飯村：そういった意味ではねそれほど日本と極端な違いはないという感じですか。

阿部：そうですね、日本でもやはり高校とか中学校に入って初めてパソコンに触るっていう生徒さんまだいらっしゃると思うのですけれども現地の高校にもやはり家にパソコンがある子ない子っていうのがいますのでそういったところで学校に入ってから本当にパソコンの電源のつけ方を

飯村：うん。

阿部：入れるところから初めて何とか word・excel の文字を打ったりとか簡単なところができるようになればいいなっていうところでやっておりました。

飯村：word ねえ。

岡野：ところで言語って英語なのですか。

阿部：言語がですね、パソコンは外国に送るのでまず英語のパソコンなのですけれども、東ティモールという国はポルトガル語と現地語のテトゥン語という言葉がありまして。

岡野：あー。

阿部：それが二つの公用語なのですけれども、インドネシアから独立したという経緯もありましてインドネシア語も広く使われておりますので、ぼくが授業をやるときにはだいたい現地語のテトゥン語かインドネシア語で多くを説明して。

飯村：うん。

阿部：ポルトガル語と英語で補足をするっていうような

岡野：は一。

阿部：たぶん聞いている生徒からするとルー大柴さんが喋ってるよりももっとごっちゃごちゃになってような下手な言葉を使って授業をしておりましてね。

飯村：ある種いい意味で適当にらっしゃった。

阿部：そうですね、でも札幌にいたときのボランティアとも繋がっているのですけれども、やはり自分一人で抱え込まないっていうことがすごくだいじだなあとあって、自分はやは

り言葉ができないけれどもまた現地の人とは違った教え方のアイデアを持っているので、現地の IT の先生とやはりたくさんお話をして自分の説明が伝わりづらいぶんはその現地の先生にフォローしてもらって。

飯村：うん。

岡野：うん。

阿部：言葉なりを言い換えてもらったりとか実演してもらったりっていうこともやって。代わりに二人でアイデアを出し合って日本流だったらこういうふうに教えてるよっていうような行けん交換をしながら。

岡野：うん。

阿部：また現地になかったような教え方っていうのを提案してみて。

飯村：うん。

岡野：うん。

阿部：これで良ければちょっと続けてみてねっていうようなものをおいてきて今彼らどうなっているのかなっていうのがすごく気になっているところなのですけども。

飯村：全般の話ではないですけどね。

阿部：はい。

飯村：全般の話ではないですけどね、なにがしかのコミュニケーションの糸口をね、なんとか探っていくっていうね、そのまとめ方がね、こういうボランティア活動に封じる仕事ですよ。

飯村：それで現地の方やはりチャレンジドいわゆる障害のある方がやはりいらしてそちらとの関わりも多少あったようですね。

阿部：そうなのです。私の赴任していた学校のすぐ近くにティモールの国立のリハビリセンターがありまして。

飯村：はい。

阿部：そこに理学療法士とか作業療法士で活動をする日本人の協力担任もきておりまして見学させてもらったりとかしましてかつてやはり内戦があった歴史がありましたので、義足を作る、技師装具士さんなんかもいまして。

飯村：あー。

阿部：そういった方の様子を見せてもらったりとか、事故とかで手足を失った子供たちとか。

阿部：そういった子供たちもリハビリに来ていたりしまして。

飯村：うん。

阿部：本当に日本と変わらない感じで彼らもなんとかしなきゃなって思いを持っているのはすごく見ることができました。

飯村：いろいろな方とまったく見知らぬ土地での体験っていうのはね。

阿部：はい。

飯村：先ほどの話ではないですけどね、どうしてもやはりコミュニケーションに尽きると思うのですよね。

阿部：はい。

飯村：今後もね活躍期待するというぜひ今後もお手伝いいただいてやっていただければと思います。

阿部：こちらこそよろしくお願ひします。

飯村：ということで今日はですね、青年海外協力隊の経験がある、阿部さんに来ていただきましたけれども、協力隊というとジャイカですよ。

岡野：うん。そうです。

飯村：ジャイカと言えば札幌チャレンジも何度か。

岡野：2、3度ですね。

飯村：はい。

岡野：札幌に研修に来ていただいている海外の方の見学っていうことで札幌チャレンジにお越しにきていますので。

こんどそういう時があればぜひ阿部さんにも参加いただいて。

飯村：そうですね。ジャイカ交流ですね。ぜひかかわっていただければと思います。

阿部：またさせていただければと。

飯村：ということで、非常にインターネットが普及してですね、全世界的にIT科の時代になってますけれども世界狭くなりました。狭くなると同時にいろいろなところでやはりいろいろな暮らしがあってやはり格差であるとかですねそのお国の事情いろいろ抱えてるものがあります。そんななかでどうやってITを利用する、世界とつながっていけるかチャレンジとつながっていけるかそれをこれから楽しみに活動していきたいと思ひます。

それではきょうもどうもありがとうございました。

阿部：岡野：ありがとうございました。

飯村：来週もよろしくお願ひいたします。

岡野：さようなら。

飯村：さようなら。